FURUSATO no HOKORI

ふるさとの誇り 其の66

まぼろしの前御勅使川堤防

お熊野堤発掘調査最新レポート2

お熊野堤（おくまんどい）

先月に引き続き、発掘調査が行われているお熊野堤（くまんどい）の最新レポートをお伝えします。

河川は堤防によって河道が固定されると、その河道内に砂や石が運ばれてきて川底が高くなり、次第に洪水の危険性が高くなってきます。そこで堤防のかさ上げが行われるのですが、さらに砂や石が堆積して川底が上がると、また堤防のかさ上げが必要となります。これが繰り返されると、周辺の地形より川底が高くなるいわゆる天井川ができあがります。

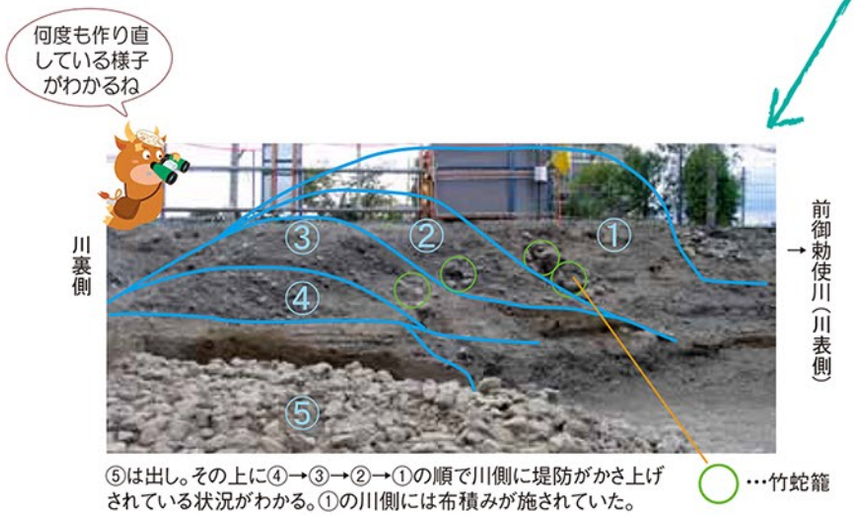
発掘調査の結果、お熊野堤は少なくとも4回以上はかさ上げされ、前御勅使川が天井川となっている様子がわかりました。

最も下の層から発見された堤防には「出し」が発見されました。「出し」とは堤防から川の中心へ向かって突き出させたもので、水流をコントロールし、川岸が削られるのを防ぐ役割を果たす、日本の伝統的な治水技術の一つです。信玄堤にも33の出しが設けられていたと言われています。お熊野堤で発見された出しは、砂を積み上げ、石で覆う「石出し」と呼ばれるものでした。石出しは、古くは豊臣秀吉が築堤したものが、京都の宇治川太閤堤跡で発見されています。また近年では、中村哲医師が代表を務めるペシャワールの会によって、アフガニスタン復興のための護岸工事に採用され、治水と農業の復興に役立っています。

これまでの調査結果をまとめると、お熊野堤は砂や石を積み上げた堤防で、最も古い時代には石出しを設けていました。その後砂や石でかさ上げされ、水流が当たる堤防の法尻（のりじり）には竹蛇籠が設置されました。そして、前御勅使川が川としての歴史に幕を閉じる明治31年の段階では、先月号で紹介したように堤防の外側に布積みされた石積みの堤防となっていたのです。

今回の発掘調査では、堤防のすべてを発掘したわけではないので、まだ下にさらに古い堤防がある可能性が高いと考えています。少なくとも5回にわたって積み上げられてきた堤防の姿は、洪水と戦い安全なくらしを求めてきた先人たちの努力を映しだしています。またそこで培われた技術は時と場所を超え、現在のさまざまな人々のくらしを支えているのです。

天井川のできるしくみ



⑤は出し。その上に④→③→②→①の順で川側に堤防がかさ上げされている状況がわかる。①の川側には布積みが施されていた。